

二〇一二年度

第三回 全統記述模試問題

国語

二〇一二年度十月実施

現・古・漢型 一〇〇分
現・古型 一〇〇分
〔現代文型〕 八〇分

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かず、左記の注意事項をよく読むこと。

注 意 事 項

- 一、問題冊子は23ページである。
- 二、解答用紙は別冊になっている。(解答用紙冊子表紙の注意事項を熟読すること。)
- 三、本冊子に脱落や印刷不鮮明の箇所及び解答用紙の汚れ等があれば、試験監督者に申し出る。
- 四、左表のような「問題選択型」が用意されているので、志望する大学・学部・学科の出題範囲・科目にあわせて、選択型を選んで解答すること。出題範囲にあわない型を選択した場合には、志望校に対する判定が正しく出ないので注意すること。

選 択 型		問 題 番 号	
1	現代文・古文・漢文型	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2	現代文・古文型	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3	現代文型	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

解答すべき問題数は、現代文・古文・漢文型及び現代文・古文型はいずれも4問、現代文型が3問である。

- 五、試験開始の合図で解答用紙冊子の国語の解答用紙を切り離し、下段の所定欄に「選択型・氏名・在・卒高校名・クラス名・出席番号・受験番号」(受験票の発行を受けている場合のみ)を明確に記入すること。なお、氏名には必ずフリガナも記入のこと。
- 六、解答には、必ず黒色鉛筆を使用し、解答用紙の所定欄に記入すること。解答欄外に記入された解答部分は、採点対象外となる。
- 七、試験終了の合図で右記五、の項目を再度確認すること。

ク ラ ス		受験番号	
出席番号		氏 名	

【共通】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。（配点 六十点）

同性婚の問題が^a「テイキ」されているのは、西洋の先進社会ないしは西洋化した社会においてである。そのような社会では、個人を権利主体とした市民法が採用されている。それは西洋近代が作り出した法システムだが、これはキリスト教的伝統に立つ社会が「世俗化」するにともなうてできあがったものである。このことは、現在の先進社会における「結婚」の問題を考えると、無視することのできない背景である。

結婚はキリスト教社会ではとりわけ重要な意味をもっていた。というのも、この宗教は性行為を「原罪」とみなし、その「原罪」からの「解放」を「救済」とみなすという際立った特徴をもっていて、性的欲望という人間の自然性を厳しく抑圧する。そしてその禁圧を A するための「秘蹟」^{（注1）}が結婚である。「結婚」にこれだけの教義的意味づけを与えている宗教はほかにないだろう。

性の禁圧を中核におくからこそ、キリスト教社会はいわゆる「世俗化」のプロセスにおいて、性の問題をクローズ・アップさせざるをえなかった。現在西洋型の社会が当面している結婚の問題は、「世俗化」と切り離しては考えられない。キリスト教によって「秘蹟」とされた結婚は、長らく教会の管轄に属していた。それがしだいに世俗権力の手に移るようになる。その変化がドラスティックだったのはフランスの場合である。

フランスでは大革命^{（注2）}によって結婚はラジカルな「非宗教化」を受けた。結婚に関する教会の権限は全面的に否定され、それは「秘蹟」から市民法的な約定（民事契約）へと性格を変えた。つまり結婚は個人の自由意志に基づく契約関係とされ、法形式的な人格をもとした市民法的関係になったのである。それによってはじめて、結婚は宗教に依^よらない「普遍的」権利になった。ただしこのとき、キリスト教色が^b「イツソウ」されたわけではなく、この民事契約を財産関係や親族関係

から相対的に独立したものとして、自由な個人としての男女の結合を正統化するために「愛」が留保され、保護すべきものとされたのだが、その「愛」はキリスト教的である。いわゆる「愛に基づく」結婚だが、現在の同性婚主張の根拠もこの「非宗教化」の延長上にある。

もちろん、結婚（ないしは婚姻）はこの社会にもある。そしてそれはいつも男と女のカップルに限られているわけではない。たとえばアフリカの一部族では、女同士の婚姻もあるという。ただしそれは個人の性的嗜好によるものではなく、男のいない家族で（あるいは夫を失った妻が）一族の系譜的持続を確保するために、女でありながら夫の位置に立つて妻を娶るといったケースだ。その場合、その妻のもとによその男が通い、そこでできた子どもがその家の子として育てられる。

けれどもこの例は、個人の自由意志や愛情を前提にした同性婚とはまったく違う。むしろ原理になっているのは家族という系譜的秩序の枠組みであり、その秩序にあつては男（夫）と女（妻）とは生物学的に考えられているのではなく、むしろ象徴秩序として指定された座であつて、その枠組みに男も女も性別を超えて入ってゆくというケースである。

結婚が「神聖なもの」だという主張は文字どおり神がかつていゝと言つてよい。けれども結婚が自由な個人による自由な結合だということも、世俗化した社会におけるキリスト教的理想の残像のようなものだろう。結婚が普遍的現象であるのは、それが自由な個人の「愛」による結合だからではなく、人間が両性の性行為によつて繁殖する動物であり、それを社会関係のなかに投錨するのが一般に「結婚」と呼ばれる制度だからである。普遍的なのは「愛による結合」ではなく、言葉で話すべき物たる人間の、生物学的かつ象徴的な再生産の条件のほうである。そのことをアフリカの部族の例はよく示している。そして結婚をこのようなものとして捉えることは、単に人間の性を生物的条件にカ^cンゲンすることではない。性もまた言葉によつて二重化され、言語化され認識されることを通して生きられる。そして結婚における夫と妻とは、系

譜的秩序のなかでの種の再生産における象徴的位置なのであり、だからこそ女が夫の位置を占めることもできるのである。¹

その結びつきをキリスト教は「愛」による結合として「聖化」してきた。それはキリスト教が性を断罪する宗教だからだ。性を断罪するからこそ、子孫を残すという生物学的要請の回路を

必要とする。そしてこの宗教体制がそれ自身の論理から世俗化していったとき、結婚は個人の自由意志に基づく民事契

約となったが、その際「愛」がこの味気ない民事契約を根拠づけ、「聖化」するものとして

C

されたのである。そ

れが自由な個人の「愛」による結合という定式を生む。その一方でまた、繁殖とは切り離され、個を基盤とした「性の自

由化」が

D

されるが、その「解放」が「結婚」の純然たる民事契約化に向かうのではなく、むしろ逆に「結婚」

が契約には解消しがたいものとしてキキユウされるのは、それが「愛」の観念によつて根拠づけられているからであり、

何らかの「聖性」を、言いかえれば「宗教性」を引きずっているからだろう。²

ついでにふれておけば、結婚の「不可侵性」は西洋的伝統をさらにさかのぼるなら、むしろ原ギリシア世界で、社会の女系から男系への転換が起こり、ポリスの世界が形成されたことと関係づけられている。つまり系譜的関係が女系による「血のつながり」から男系による制度的秩序へと転換したとき、父権的社会が「婚姻の神聖不可侵」を

E

したのである。これはギリシア悲劇の読解を通じてバツハオーフェンが明らかにしたことだが、その意味では結婚は父権的秩序形成のカナメなのである。³このことを「結婚願望」派はどのように理解するのだろうか。

(西谷修『理性の探求』)

(注)

1 秘蹟……キリスト教で、神の恵みを信徒に与える重要な儀式・方法。サクラメント。「秘蹟」はローマ・カトリックの用語で、プロテスタントでは「礼典」または「聖礼典」、ギリシア正教では「機密」と称される。

2 大革命……一七八九年のフランス革命のこと。

問一 傍線部 a i e のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄

A

E

を補うのに最も適当なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。

ア 留保 イ 解除 ウ 保証 エ 要請 オ 推進

問三 傍線部 1 「女が夫の位置を占めることもできる」とあるが、なぜか。九十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問四 傍線部 2 「『宗教性』を引きずっている」とあるが、どういうことか。八十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問五 傍線部 3 「このことを『結婚願望』派はどのように理解するのだろう」とあるが、どうして筆者はこのように言うのか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 愛に基づく同性同士の結婚を望む人は、既存の秩序を乗り越えようとしているはずなのに、結婚がそもそも父権的社会的伝統を支えるものであるなら、意図せずともそうした秩序の形成に寄与することになってしまうから。

イ 愛に基づく同性同士の結婚を望む人は、古代ギリシア的な世界観を知らぬまま、ひたすら結婚の「不可侵性」を否定するだけで、結婚が西洋的伝統のなかでどのようにして成立し発展してきたかを理解しようとしなから。

ウ 愛に基づく同性同士の結婚を望む人は、女系による「血のつながり」も、男系による制度的秩序も超えたところで結婚を考えているため、結婚が性別とは無関係な普遍的現象であることに気づく可能性があるから。

エ 愛に基づく同性同士の結婚を望む人は、古代ギリシア以来の西洋的伝統からも、キリスト教的な桎梏しづくからも解放

されているため、自由な個人の見地に立つて、未来における新たな結婚の形態を構想する能力を秘めているから。

オ 愛に基づく同性同士の結婚を望む人は、人間の繁殖に必要な生物学的条件を無視するだけでなく、社会秩序の形成に必要な父権的制度を考慮せずに、ただ単に自分たちの都合だけで「性の自由化」を唱えているから。

問六 本文の内容に合致するものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 愛し合う者同士であれば同性であっても結婚してよいという考えは、西洋近代にのみ見られる特殊なものではなく、世界中で普遍的に見られる現象である。

イ 西洋社会で同性婚が合法化された背景には、個人を権利主体とした市民法がフランス革命によって成立し、結婚が法的な約定になったという事情がある。

ウ 自由な愛があれば同性の結婚も法的に認められると主張することは、結婚が教会の管轄を離れ、個人の自由意志に基づく世俗的なものになったことに由来する。

エ 古代ギリシアのポリスの世界において、社会の中軸をなす関係性が女系から男系に変容したことによって、家族という制度がはじめて西洋社会に定着した。

オ 男系による制度的秩序を重視する西洋的伝統とちがって、女同士の婚姻を認めるアフリカの習慣は、今日における「性の自由化」を先取りするものである。

【共通】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。（配点 四十点）

人は複数の集団に帰属して生きている。現代の日本であれば、家族や親族、町や都道府県、国、会社や学校、それに同窓会や同好会などが、人々の帰属する集団の代表例である。日本という国家とそれに帰属する日本人という意識が重要だと思ふ人も多い。

通常、これら複数の人間集団は、みなそれぞれの歴史を持っていると信じられている。家族には家族の歴史が、大学には大学の歴史があり、町には町の歴史がある。歴史を共有しているという思いが人々の仲間意識を強め、結果としてその人間集団の凝集力が高まる。国が義務教育で生徒たちに日本の歴史を教えるように求めるのは、将来の日本人に日本国民としての意識を持たせるための措置として至極当然である。

これと同様に考えれば、私たちが地球というコミュニティの一員であることを強く意識し、地球への帰属意識を高めるためには、どうしてもその歴史、すなわち地球社会の歴史が必要となる。それは、日本やアメリカ、中国といった別々の国の歴史を集めて一つにした世界史ではない。

A、ヨーロッパや東アジアなどの地域世界の歴史を集めて一つにしたものでもない。これらの世界史は、国や地域への帰属意識を高めるものではあっても、地球市民意識の涵養^{かんよう}には無力だからである。地球社会の歴史は、「世界をひとつ」と捉えるときに、世界中の様々な人々への目配りを怠らず、彼らの過去を描くものでなければならない。新たにそのような世界史を構想するべきだ。

現実の世界が主権国家を単位として構成され、国が人々の基本的な帰属単位である現代世界では、地球社会を対象とする世界史の実現はきわめて難しい。しかし、これは挑戦のしがいのあるテーマである。世界の行く末を真剣に考えたとき、必ず成し遂げねばならない事業でもある。積極的に地球社会の世界史構想の議論を進めてゆけば、やがてそれが大きな力

となって、人々に進むべき未来の姿を指し示すだろう。

大学院で歴史の研究を始めた当初、私はサファヴィー朝史の研究者だと自認していた。サファヴィー朝とは、西アジアのイラン高原を中心とした地域で一六〇一―一八世紀に政治権力を握っていた王朝の名前である。その後、徐々に都市や建築、さらには中東の他地域の歴史にも関心が広がり、一九九〇年代には「イスラーム世界」の歴史を研究していると自認していた。大学での講義や一般向けの講演で、歴史に限らずイスラーム教やイスラーム教徒全般について話をせねばならない機会が増え、そのたびに、一般の人たちのイスラーム教やイスラーム教徒についての理解は間違っている、イスラーム教はそんなに厳格で狂信的な宗教ではない、イスラーム教徒の大半は私たちとごく普通につきあえる良識のある人たちだと繰り返し語ってきた。

B、世間の「常識」はまったく変わらない。それどころか、二〇〇一年九月一日の同時多発テロ以来、イスラーム教やイスラーム教徒を見る目は厳しさを増す一方である。これは、日本だけの現象ではない。欧米はもちろん、中国や韓国の友人と話していても、「イスラーム教徒は特殊だ」といった類の過剰とも思える反応がしばしば見られる。私は自分の無力さを痛感するとともに、一体なぜこうも人々の常識が変わらないのか、その理由を真剣に考えるようになった。

いまの私は問題の根源まではっきりと見通せたような気がしている。「イスラーム世界」だけが問題なのではない。問題なのは、私たちがほとんど無意識のうちに受け入れ、常識と化してしまっている世界全体の見方なのだ。

いま、世界を一つのジグソーパズルに例えてみよう。「イスラーム世界」はこのパズルを構成する一枚のピースである。ゲームの前提として、「世界」という全体の図柄はすでに決まっている。

C、各ピースの色と形は自由には変えられない。ある部分の色と形が変わると全体の図柄が完成しないからである。各ピースだけを取り上げて、その形や色について論じるのは自由である。¹しかし、その一枚をパズルにはめ込むときには、全体のデザインに合わせなければならないのだ。私が、人々のイスラーム理解が間違っているといくら主張しても世間の見方が変わらないのは、そのためである。私

がイスラーム教や「イスラーム世界」というピースのデザインと色についてだけ説明するかぎり、人々は話を理解する。

D

「なるほど、そういうことだったんですね」と納得する。しかし、全体の図柄の中に再びそのピースを置いた途端に、人々のイスラーム理解は元に戻ってしまうのだ。全体のデザインが決まっているからである。

では、全体のデザインはどんなもので、それはどこでどう決まったのだろう。全体のデザインの基本は、一九世紀後半までにはつきりと姿を現す「ヨーロッパ」対「非ヨーロッパ」という世界認識である。それ以来、この見方を受け入れた人々が、世界中で色と図柄を精緻化する作業を営々と続けてきた。自と他を分け、先進的な「ヨーロッパ」E「西洋」(これは北米の重要性を意識する場合によく使用される)は、他の人々とは違うと考える二項対立的な世界観が基本的な構図である。フランスや日本といった国民国家のシステムも、自と他を峻別するという意味で、この二項対立的な世界観の上に乗っている。

一九世紀から二〇世紀初めにかけての時期に形成された人文社会科学系の学問の多くは、この二項対立的な見方を内包して理論化・体系化を進め、整理や分析という区別のための方法論を整え、その見方に沿った知を今日に至るまで再生産し続けている。ここで詳しく述べる余裕はないが、このことは資本主義「ヨーロッパ」が発展段階の上位にあり、「アジア的生産様式」を引きずるアジアは遅れていると考えたかつてのマルクス主義経済学や歴史学のことを想起すれば、容易に理解できるだろう。文学、哲学、宗教学などの人文学系の学問と政治学、経済学、社会学など社会科学系の学問は、多かれ少なかれ研究の前提としてこの非対称で二項対立的な世界の捉え方をなかば暗黙のうちに前提としてきた。また、日本や中国など「非ヨーロッパ」の多くの知識人は、この世界認識を受け入れたうえで、その中で自分たちの国や国民の立ち位置がどこにあるのかを真剣に考えてきたのだ。

一〇〇年以上に亘^{わた}って生み出され続けてきた世界についての人文社会科学の知の総体が、私たちの世界を見る眼をがんじがらめに縛っている。一般の人々の世界認識が容易に変化しないのは当然である。一九世紀以来の世界認識に基づく人

文社会科学知の中で、「イスラーム世界」の位置と役割は決まっている。「他」としての「イスラーム世界」はいくら説明しても「自」にはなりえないのだ。

私たちが現代世界を理解する際に歴史は大きな役割を果たしている。私たちが無意識のうちに受け入れている世界認識の基本を変えなければ、袋小路に入り込んでいる現代世界の諸問題の解決は難しいだろう。

最近、人文学の領域で、新しい世界史の構想と同じような動きが軌を一にして起こっている。新しい世界史と似た考え方に基づく世界文学の構想や国民文学という枠組みの相対化、中国哲学やフランス思想など国民国家別に分類された哲学思想研究の見直し、宗教や美といった概念の再検討など、いくつもの新しい傾向を指摘することができる。これら新しい学問がまとまってやがて大きな知の潮流となり、目に見える成果を次々と出しはじめてやつと、人々の世界の見方は変わってゆくのだろう。まだ遠い未来の話であるようにも思える。しかし、私は遠くを見て、元気を出して同志とともに歩き続けることにしたい。

(羽田正『新しい世界史へ』)

問一 空欄

A

イ

E

を補うのに最も適当なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。

ア しかし イ ないし ウ そして エ むろん オ それゆえ

問二 傍線部1「しかし、その一枚をパズルにはめ込むときには、全体のデザインに合わせなければならないのだ」とあるが、ここではどういうことか。九十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問三 傍線部2「人々の世界の見方は変わってゆくのだろう」とあるが、筆者がここで期待しているのはどのようなことか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 各国の国民が主権国家に対して抱く帰属意識が薄れつつある現代において、それに代わる地球社会への帰属意識を人々が持てるようになること。

イ 「世界をひとつ」として捉える素朴な地球市民的な感覚や地球社会への帰属意識を醸成し、世界各国の歴史を公平に記述できるようになること。

ウ イスラーム世界の研究者を自認する者として、同時多発テロ以来、世界に流布されたイスラーム世界の誤解が解かれ、正しい認識が広まること。

エ 人々が主権国家にのみ帰属していることで生じる問題を解決するために、世界中の人々の相互理解を深め、地球市民意識を醸成すること。

オ 主権国家を単位とした従来の世界観から脱却し、人々の多様なあり方に配慮しつつ世界規模の共同体の一員としての意識を共有すること。

問四 本文の内容に合致するものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えよ。

ア 世界各地の主権国家が義務教育を通じて生徒に自国の歴史を教えていることは、現在の国際化の進行の中で国民の自国に対する凝集力が失われつつあることを示唆している。

イ 各国別、各地域別の歴史は、それぞれの国や地域への帰属意識を高めるものでしかない以上、それらをいくら総合しても地球社会への帰属意識の醸成に結びつくことはない。

ウ 人々が暗黙のうちに所有している特定の社会に対する認識図式を変えることさえできれば、一九世紀以来存続している、世界に関する固定観念を変えることができるはずである。

エ 一〇〇年以上に亘って産出されてきた現代の人文社会科学の知の総体を中国や日本の知識人が積極的に取り入れることにより、非西洋が西洋に追いつくことが可能になった。

オ 世界文学の構想や国民文学という枠組みの相対化を通じて世界についての新しい見方が生まれているが、中国哲学やフランス思想にはそれとは異なる新しい傾向も読み取れる。

カ 歴史は過去の人々の暮らしやそのありようを記述したものでありながら、これから訪れる未来に生きる人々の意識やその社会のありようまでも変えていく可能性を含んでいる。

次の文章は、『柴花物語』の一節で、花山天皇（上・内）の子を身ごもり里下がりをしていた女御（一条殿の女御）が、天皇の求めに応じて参内する場面である。これを読んで、後の問に答えよ。（配点 五十点）

かくて参らせ給へれば、あはれにうれしう思しめして、夜昼やがて御膳^(注1)にもつかせ給はで入り臥させ給へり。「あさましうものぐるほし」とまで内裏^(注2)わたりには申しあへり。女御は参らせ給へりし折にもあらず、かくただならずならせ給ひて後は、内裏におはしまし折^(注3)よりもこよなく細らせ給へりしを、まいてこのたびは¹その人とも見えさせ給はず、あさましうならせ給へり。いと戯^(注3)れをかしうおはせし人ともおぼえず、いみじうしめらせ給ひて、ただあべいにもあらぬ嘆きをのみせさせ給へば、上も泣きみ笑ひみ、涙に沈ませ給へり。いみじうあはれに悲しき御事どもなり。

さて三日ありて、出でさせ給ひなんとて、御迎への人々、御車などあれど、すべて許し聞こえさせ給はで、今夜今一夜と、留め奉らせ給へるほどに、七八日になりぬれば、御慎みもよそにてはいとうしろめたしとて、大納言いとまめやかに奏し給へば、泣く泣く御暇^(注4)許させ給ひても、御輦^(注6)車ひき出でてまかでさせ給ふまで、出で居させ給へり。大納言あはれにかたじけなう思されて、わが御面目もめでたくて、さまざま御涙も出でければ、ゆゆしくてしのびさせ給ふ。なかなかわりなく思されて、上さへ例のやうにもおはしまさぬを、女房²などいとはしう聞こえさす。

一条殿の女御は、月ごろはさてもありつる御心地に、こたみ出でさせ給ひて後は、すべて御頭^(注5)ももたげさせ給はず、あさましう沈ませ給ひて、ただ時を待つばかりの御有様なり。大納言、泣く泣くよろづに惑はせ給へど、かひなくて、孕ま^(注5)せ給ひて八月といふにうせ給ひぬ。大納言殿の御有様、書き続けずとも思ひやるべし。内にも垂れ籠めておはしまして、御声も惜しませ給はず、いとさまあしきまで泣かせ給ふ。御乳母^(注5)たち制し聞こえさすれど、聞こしめし入れず。あはれに

いみじ。

一条殿には、さてのみやはとて、例の作法の事どもしたため聞こえ給ふも、あさましう心憂し。^(注7)「率て出で奉る折などは、后になし奉りて、御輿にて出だし入れ奉りて見奉らんとこそ思ひしか、かくやは」と、伏しまろび泣かせ給ふ。内にはさべき御心よせの殿上人、上達部の睦まじきかぎりは、皆かの御送りに出だしたてさせ給ふ。⁵わがよそに聞くことの悲しさを、かへすがへす思し惑はせ給ふ。夜一夜、御殿籠らで思しやらせ給ふ。大納言殿は御車の後に歩ませ給ふも、ただ倒れ惑ひ給ふさまいみじ。果ては雲霧にてやませ給ひぬ。

(注)

- 1 御膳にもつかせ給はで——お食事もおとりにならないで、ということ。
- 2 参らせ給へりし折にもあらず——入内当初の様子とは異なり、ということ。
- 3 戯れ——洒落ている、ということ。
- 4 御慎み——御物忌みの祈禱。
- 5 大納言——女御の父、藤原為光。後出の「一条殿」も同じ。
- 6 御輦車——輿の形をした屋形に車輪をつけ、人が引いて動かす車。東宮や女御などのうち、天皇から許された人だけが乗車できた。
- 7 例の作法の事ども——通例の葬儀にまつわる作法の数々。
- 8 率て出で奉る折——懷妊がわかった女御を里下がりさせた時、ということ。

問一 傍線部1「その人とも見えさせ給はず」・3「さてのみやはとて」・5「夜一夜、御殿籠らで思しやらせ給ふ」の

意味として最も適当なものを、次の各群のアイオの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- 1
- ア どなたともお会いにならず、
イ 本人だともお見えにならず、
ウ 身重の人ともお見受けできず、
エ 他人だともお分かりにならず、
オ 天皇にも自分の姿をお見せせず、

- 3
- ア そのようにしかできないとはいうものの、
イ そのようにしてさえつらいのだといいながら、
ウ そうするのがよいだろうということ、
エ そうばかりしてられないということ、
オ そうすることだけがすばらしいのかといって、

- 5
- ア 一晩中、一睡もなさないで仏事に専念なさる。
イ その夜だけは、寢室にお入りにならず嘆きなさる。
ウ 夜通し、おやすみにならないで思いを馳せなさる。
エ 毎晩毎晩、睡眠もおとりにならず冥福を祈りなさる。
オ その夜ずっと、寢室に籠もって思い出にひたりなさる。

問二 二重傍線部「あべいにもあらぬ」に含まれる助動詞を三つ、終止形で答えよ。

問三 波線部 a ー e の動作の主体として最も適当なものを、次のアーカの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア 花山天皇 イ 女御 ウ 大納言 エ 殿上人・上達部 オ 作者 カ 読者

問四 傍線部 2 「女房などいとはしう聞こえさす」とあるが、女房たちは何についてどうだと言っているのか。六十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問五 傍線部 4 「伏しまろび泣かせ給ふ」とあるが、大納言はどういうことについて嘆いているのか。五十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問六 『栄花物語』と同時代の内容を記す歴史物語を、漢字で記せ。

四

現・古・漢型

次の文章を読んで、後の問に答えよ。(設問の都合で、送り仮名を省いたところがある。)(配点 五十点)

予讓欲殺趙襄子。滅鬚去眉、自刑以變其容。為乞人而往、乞於其妻之所。其妻曰、「状貌無似吾夫者。其音何類吾夫之甚也。」又吞炭以變其音。其友謂之曰、「子之所道甚難而無功。謂子有志則然矣。謂子智則不然。以子之材而索事襄子、襄子必近子。子得近而行所欲、此甚易而功必成。」予讓笑而応之曰、「是為先知報後知也。為故君賊新君矣。大乱君臣之義者、無此。失吾所為為之矣。凡吾所為為此者、所以明君臣之義也。非從易也。」

(注)

○予讓——春秋時代の人。主君を趙襄子に殺された。

○趙襄子——春秋時代の晋の重臣。

○刑——罪人の印として入れ墨を入れる。

○乞人——物乞い。

(呂不韋『呂氏春秋』)

問一 傍線部イ「易」、ロ「凡」の読みを、送り仮名も含めて平仮名ばかりで答えよ。

問二 傍線部 a 「容」、b 「材」の意味を、それぞれその漢字を含む二字の熟語で答えよ。

問三 傍線部 1 「其音何類吾夫之甚也」を現代語訳せよ。

問四 傍線部 2 「子得近而行所欲」を書き下し文に改めよ。

問五 傍線部 3 「是為先知報後知也」はどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア それはすでに道理を悟っている人が、道理を知りたいと願っている後進たちを教え導いていくということである。

イ それはあらかじめ知っていた事実、後から新たに判明した事実を付け加えて報告するということである。

ウ それでは最初に自分を評価し支援してくれた人のために、後から評価してくれた人に恩返しをするということになる。

エ それでは先に自分を認め手厚くもてなしてくれた人のために、後に自分を認めてくれた人に復讐するということになる。

オ それでは以前から面識があっただけの人のために、後に付き合うようになった人に仕返しをするということになる。

問六 傍線部4「大乱君臣之義者」とあるが、予譲は友人が勧めたどのような行為をどういう理由で「君臣の義」を乱すものとして否定したのか。六十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問七 傍線部5「為此」とは具体的にはどういう行為をさすのか。本文中から五字以内で抜き出して答えよ（返り点・送り仮名・句読点は不要）。

五

現・古型

【現代文型】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。（配点 五十点）

小説の文学的な価値を点数で表わすなどということが、果して可能なものであろうか。時おり文藝時評で作品を点数で評価する御仁^{ごじん}がいる。点数で評価しないまでも、今月のベスト・スリーとか、今年度のベスト・ファイヴとか、今年度第一等の秀作などと序列をつけて評価するのは、点数をつけるのとあまり差はない。批評家が文藝時評の担当を終えた時などによく、この間大きい間違いのなかったことをひたすら願うのみとコメントするのを聞くことがある。ということは、A

的で、公平で、間違いのない、完璧な百点満点の批評が存在すると思っっているということである。

もしこれが小説ではなく、もしこれが長い年月の反復によって練り上げられた型を持つ世界なら、点数や序列で評価することも不可能ではない。現に碁将棋、柔道剣道などは段級によって錬磨習得の程度を示し、生花や茶道なども初伝とか奥伝という段位制に等しい位^{くらい}づけを持っている。文藝の世界でも、和歌や俳句などのB的な世界では序列によって評価することが可能であらうし、現に短歌や俳句の雑誌では、入選句の数や配列の順番によってそれをやっている。藝の世界には確^{かっ}乎^こたる型があり、型の習得がすなわち藝のC的な中身なので、点数や序列によって習得の度合いを示すことも可能である。それが専門家あるいは熟練者による技術批評である。

それでは小説の場合はどうなるのか。小説は型を持たない、何をどう書いてもいい世界であり、本来ニワカである。だから型の習得の度合いによって点数をつけるなどは出来ない相談である。それでもなおかつ小説を点数や序列で評価することが可能だと考えるとしたら、その根拠は何であらうか。その場合判断の目安になる、型以外の何かがある筈である。

詩であれ劇であれ小説であれ、個々の文学作品を生み出す主体は個性を備えた自覚的な我、すなわち自我であり、自我が自分の力で作品を創造するというのが、近代文学の根柢をなす考え方である。そうやって創造された作品は、一回的で、

完結的で、円満完成したもので、個性の刻印^aを紛れようもなく印している。人間はまるまる白紙状態の心をもってこの世に生れ、次第に自我意識が目覚めるにつれて、周囲の影響を受けながら、知識を深め、心の内容を豊かにし、成長と発展を遂げ、究極の自己完成に向って進歩向上を続けて行く。心は白紙の状態から自分で開き育てたと思ひこんでいるのだから百パーセント自分で支配できると考えても無理はない。

作品の創造も、そのような自己実現、自己完成の一環なのである。しかもその創造のプロセスはあらゆる細部まで、すべて自覚的、意識的に組み立てられている。すなわち、すべて論理によって跡付け、確認できるということである。作品を構成し成立せしめるべき要素をすべて検討し、取捨選択し、理論によって組み立てたのが個々の作品である。意識的、論理的に構成されたということは、逆から言えば作品をさまざまな構成要素に分解し分析することもできるということである。それを方法論という。作者自身にも読者自身にもそれがはつきりしていないという場合、作者や読者に代って方法論を駆使して分解組み立てを代行するのが批評である。この方法論によって、藝はミューズの支配を脱して自覚的な藝術となったのである。現実を冷静に観察し、現実を構成する要素を見究め、出来るだけ現実に近いもうひとつの文学的現実を構成するのが文学的創造行為であり、それによって現実の意味を探るのがリアリズムである。そのように自覚的に構成されたものは、従来の概念でいう藝とはまったく違ったものであり、藝術の名で呼ばれるようになったのである。

藝術概念を支えているのが創作意識と方法意識であり、批評の内実はもっぱらこの二つの原則に則^bって成立し進行しているとしたら、批評はすなわち藝術概念を讀え守護し、その原則に背き抗^cうものは攻撃する親衛隊のようなものとは言えないだろうか。文学作品が一回的、完結的、個性的な創作であり、しかもそれはさまざまな要素に分解分析できるとなれば、その度合いを点数や序列で評価できると考えてもそれほど不都合ではない。事実、近代批評も、国文学や外国文学の研究も、作家や詩人の血筋、生い立ちから、教育、交遊、恋愛、趣味など実生活の細部まで立ち入って、それらの伝記的事実によって作品を解説することを批評と考え、研究と思ってきたのである。今でこそあまり見かけなくなったが、例え

ば中村光夫の「二葉亭四迷伝」や亀井勝一郎の「島崎藤村論」のような²評伝が批評家の本来の仕事と考えられていたのである。

プロレタリア文学理論というのがある。上部構造である文学は、下部構造である社会の経済的条件に必然的に影響され支配されていて、従って文学作品は当然残る限なく社会的、経済的ファクターに分解できるといふ考え方である。この左翼文藝理論は一時期は一世を風靡したこともあるが、今では近代批評の内部で多少とも異端視され、D 的關係を生むことが多い。それは恐らく、国文学や外国文学の研究の世界でも同じであろう。しかし文学作品を構成的視点で捉え、これを論理的に分解分析できると考える点では、どっちもどっち五十歩百歩ではなからうか。むしろ、方法論が近代批評の大きい本質的要素³としたら、プロレタリア文学理論は近代批評のひとつの究極の形だと考えた方が判りが早いかもしれない。

もうずいぶん昔の、私の子供の頃の戦争中の話だが、新聞か雑誌で、正宗の銘刀の成分の化学分析に成功して、モリブデンだか何かの物質が含まれていることが判明したという記事を読んだことがある。子供だった私は浅墓^{あさはか}にも、そうか、これからはその物質を入れて、機械で合成して正宗の銘刀を製造することができるようになるんだな、すばらしいことだと、感心した。もしかすると近代批評というのは、正宗の銘刀の価値を化学分析によってはじき出すことができ、逆にそれを構成し、合成することができると考えるのと、大差はないのかもしれない。

(福田宏年『時が紡ぐ幻』)

(注) ミューズ……ギリシア神話に登場する、詩や音楽などを司る女神。

問一 傍線部 a ~ d の漢字の読みをひらがなで記せ。

問一 空欄

A

D

を補うのに最も適当なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。

ア 対立 イ 伝統 ウ 実質 エ 客観

問二 傍線部1「それでもなおかつ小説を点数や序列で評価することが可能だと考えたとしたら、その根拠は何であろうか」とあるが、筆者が「その根拠」と考えているものは何か。本文中から十字以内（句読点等を含む）で抜き出して答えよ。

問四 傍線部2「評伝が批評家の本来の仕事と考えられていた」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア リアリズムという近代文学特有の尺度は、作者自身の生活をどこまで忠実に反映しているかによって作品の質を測るものだから。

イ 作家や詩人の伝記的事実を知った上で、作り手の立場に立つことによってしか、作品の深い理解を得ることはできないから。

ウ 現実に近いもう一つの現実を構成するのが文学的創造行為であり、その本質を見極めるためには、作者の伝記的事実を知らねばならないから。

エ 作品が作者の人間の成長や発達を反映したものである以上、作品を評価するには、その成長の度合いを伝記的事実に求める必要があるから。

オ 批評とは、作者の個性の刻印である作品を擁護するためのものであるので、その個性を生み出してきた生活の細部を知らねばならないから。

問五 傍線部3「方法論が近代批評の大きい本質的要素だ」とあるが、ここで言う「近代批評」とはどのような営みか。七十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問六 本文の内容に合致するものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 化学的な分析と総合を経て物を作り出すことを可能にする科学技術と異なり、藝術においては作品を分解してもそこから何かを生み出すことはできない。

イ 藝術の概念が近代において確立し普及するなかで、批評はそれをときに守りときに批判するという、つかず離れずの関係を保ってきた。

ウ 長年の反復によって練り上げられた型を習得することを重視する藝とは異なるところにこそ、小説の存在意義がある。

エ 文学の近代化にとって、人間は無垢の状態で生まれ、他に左右されることなく自分一人の力で自分を育てるものだという人間観が必要だった。

オ 近代的な藝術概念が成立することによってはじめて、文学もまたその一部として、点数による評価が可能になった。

問七 二葉亭四迷（X）、島崎藤村（Y）の作品を、次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア 日輪 イ 浮雲 ウ 斜陽 エ 夜明け前 オ 螢川 カ 山の音

